「食品廃棄～信心のしるし」

●恵方巻きの思い出

『ザ･ベストテン』（1978～89、TBS系列で放送）や『ニュースステーション』（1985～2004、テレビ朝日系列で放送）の司会者として知られ、東京育ちの久米宏さんが、最近、ラジオの番組で恵方巻きの話をしていました。
今から40年ほど前、関西の芸人が、

「節分には、みんなで同じ方向を向いて、しかも、黙って、海苔巻き鮨を食べるんや」

と言うと、久米さんをはじめ、関東の人たちは、

「ウソでしょ。そうやって、関西の人は、関東の人をだまそうとしても、だまされませんよ」

とやり取りしていたというのです。
たしかに、東京圏に育った私も「恵方巻き」という存在すら知りませんでした。それが、全国のスーパーやコンビニで販売され、大々的に宣伝された2003年頃から、あれよあれよという間に節分の食べ物として耳にするようになりました。ただ、私は今のところ、口にしたことはありません。

●食品の廃棄ロス問題

数年前から、この恵方巻きの大量廃棄問題がマスメディアで取り上げられています。
報道によると、2019年1月、農林水産省は、恵方巻きの販売が本格化する前に、スーパーやコンビニなどが加盟する食品小売業者の団体に、消費者の需要に見合った販売をすることで、廃棄ロスを減らすよう求める文書を通知しました。
そこでは、チラシに「もうやめにしよう」というキャッチコピーを掲げ、恵方巻きの大量廃棄問題を消費者に問いかけた、兵庫県内のスーパーが紹介されました。
こうした背景には、2015年9月、国連で、SDGs（持続可能な開発目標）が採択されたことも大きな関係があります。
17ある目標のうち、12番目の「つくる責任　つかう責任」で、
「2030年までに小売･消費レベルの食品の廃棄ロスを半減させる」
という数値目標が設定されたのです。
これらの問題提起は、現代社会の経済や流通の抱えたる問題点を深いところで考えさせ、私たちに、様々な警鐘を鳴らすものだと思います。しかし、問題は、そうした客観的な数値を抑えるだけに留まらないように感じられます。

●『芸藩通志』に私を問う

江戸時代、『芸藩通志（げいはんつうし）』という、安芸の国（現･広島県西部）の郷土史的性格を持つ書物が1825年に編纂されました。和綴じで159巻もあり、地域ごとの産物や文化的傾向などが記されています。
興味深いのは、安芸門徒といわれる浄土真宗の熱心な信者には、他の藩に比べて、次のような特徴があるというのです。

一、神社で、ご祈祷をしない。神棚をまつらない。
二、その結果、医師や薬屋の数が多い。
三、間引き（中絶）が少なく、人口増加が多い。
四、その結果、出稼ぎする文化が生まれた。
五、精進の日を忠実に守った。（ご命日になまぐさ物を食べない）
六、その結果、後々まで養蚕業が振るわなかった。（生きた蚕を殺生することを嫌がった）

「今日は親の命日だから、お精進で過ごしましょう」という言葉は、ほとんど日常から消えて死語になり、説明しないと、伝わらない文化になってきています。
ところが、安芸門徒は毎月十六日、聖人のご命日をお精進で過ごすので、魚や肉を買わなかった、それで、店を開いても売れないので、魚屋と肉屋が休みになった、すると、市場も仕入れに来る人がいないから休みにしたというのです。
それが、広島市や呉市などに、「おたんやのいちどまり」という言葉で伝わったそうです。「おたんや」とは、ご命日のお逮夜（たいや）参りのことです。「いちどまり」とは、市場がお休みになるという意味です。これは戦後まで続いていたそうです。
誰かが押しつけたのではなく、一人ひとりの生活に心（信心）が育つと、何らかの形（しるし）で反映するのです。
食品廃棄をしてはいけないと批判的に論ずるだけでなく、心を育てることの大切さにも心を向けたいと、私は思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。